

看護実践・キャリア 支援センター通信

2025年
4月

看護実践教育 上級臨床指導者企画研修

Vol.30

1月17日(金)に令和6年度の上級臨床指導者育成プログラム受講者の企画・運営により、研修を開催し、実習指導者44名が参加しました。

「今日から使える対話術～指導が苦手なスタッフに保守的になっていませんか～」というテーマで「話しかけにくい人」への対応を考えました。話しかけ方の工夫、全体的な環境の整備等、苦手意識に対する向き合い方について学び、またグループワークで自分の部署での取り組みについて話し合いました。指導者同士で、意見交換することで、今後の対応を前向きに考えられるようになったようです。



性格をマンガのキャラクターに例えて理解

看護実践教育 専門看護師・認定看護師の実践を知る



リハビリ・摂食嚥下・認知症領域で実施

高度な専門性を持つ臨床看護師の実践の現場に立ち会うことで、これからのキャリアを考えていただく今年度2回目の「専門看護師・認定看護師の実践を知る」には、3名の方が参加しました。1～2月の1日間、それぞれ異なる希望領域の認定看護師の看護を間近に見学しました。今回は5～6年目のこれから自分の専門性についての方向性を考え始めた方が受講されたように感じます。活躍する先輩の姿が、彼らのステップアップにつながることを期待します。

看護実践教育 復職支援サロン

2月4日(火)、復職間近の育休の看護職を対象にZoomで復職支援サロンを開催し、14名が参加しました。

第1部では復職時に利用できる制度や心構えの他、復職までの流れや復職経験者からの話を聞きました。

第2部の質疑応答では、休日希望のコツなどが聞かれ、回答する先輩看護師からは「私は金曜に夜勤を入れることで土曜日を明けにして、日曜日は通常の休みをもらうようにしている」とか「夜勤なしだと手取りがかなり減ったので、夜勤を入れるようにした」等具体的な話が出ていました。

話を聞くことで、不安を少しでも減らして、元気に復帰していただければと思います。



人事課や人事担当副部長からの説明も



地域貢献事業

「家族」の力を見極め、支援を考える 家族看護

・家族は、家族という一つの集団が誕生して消滅するまでの変化の過程を有し、その中で様々な課題に取り組み、乗り越えながら「家族」として成長していく



・家族は、「家族」という集団としてセルフケアのニーズを充足し、健全な家族の生活を維持していこうとする能力を有している。

現在の看護には様々な家族の姿に対応する力が必要

2月11日(火・祝)に、奈良県立医科大学医学部看護学科実践基礎看護学 升田茂章教授と高知県立大学看護学部精神看護学 畠山卓也准教授による家族看護研修を行い、24名の参加がありました。

多様な価値観が尊重される現在、家族の有り様も同様に多様化しています。研修では、自分の価値観を排して、患者とその家族の関わりや力を見い出していくことの大切さが語られました。在宅看護が更に重要となる中、「家族」を客観的に捉えることが、今の看護に必要であると再認識できた研修でした。

看護学科学生へのキャリアデザインプログラム

「今のキャリアから見た看護」上映



3月3日(月)、看護学科2・3年生を対象に昨年実施した附属病院で活躍する先輩看護師の講演「今のキャリアから見た看護」の上映を行いました。

講演では、先輩達が資格を取得したり、現場で華やかに活躍したりという話よりも、むしろそこに至るまでの様々な挫折や迷い、葛藤を乗り越えた先に見えた「今の自分の看護」を語っていました。

学生達の未来には様々な看護職としての人生が広がっています。今回の上映は社会人になる前に「自分の看護像」を考える良いきっかけとなったようです。



先輩の思いの変遷から看護を考える



特定行為研修成果発表会



特定行為研修管理委員会
副委員長 地域医療学講座
教授 赤井靖宏先生
から Teams で講評



院外からも視聴がありました

3月5日(水)、令和6年度の特定行為研修の研修生14名による成果発表会を対面と Teams のハイブリット形式で開催し、院内外から40名を超える参加がありました。

午前に急性期コース、午後に慢性期・在宅コースの研修生から、研修で学んだこと、事例を通じて考えさせられたことや今後の展望の発表がありました。専門的な知識と臨床での体験により、特定看護師としての役割や責任を改めて認識し、今後の課題や展望を見いだせていました。この発表を通じて、同期の看護の視点のレベルの高さを共有できたことで、研修生のモチベーションも上がったように感じます。

看護基礎教育・看護実践教育 上級臨床指導者育成プログラム修了者 チェンマイ大学病院研修修了者・特定行為研修修了者伝達講習会



3月18日(火)、院内看護職者を対象に看護実践・キャリア支援センターが関わったチェンマイ大学交流事業・上級臨床指導者育成プログラム・特定行為研修(院内のみ)の受講生による伝達講習を開催しました。

上級臨床指導者育成プログラム受講生は、研修で学んだ違う世代や考え方の違う人への対応を学んだことを元に、実習指導者に対する研修を企画・運営したこと等が報告されました。

チェンマイ大学交流事業への参加者からは、高度な情報化を取り入れた病院経営の一方、過疎地域の慢性的な医療不足へはLINE等により対応している現状が説明されました。また、患者の意思決定を何重にも確認したり、伝統医療を大切にしたりと、様々な面で学びが深められたことが報告されました。

特定行為研修の研修生からは研修を通じて気付くことができた臨床の現場で求められていること、そのことで必要となる知識等、知識とその重要性を経験の上から熱く語られました。

参加者からは、看護の専門性や看護の質向上について改めて考える機会になったことやそれぞれの学びや今後の展望を聞くことで様々な視点で看護を学ぶことの大切さに改めて気付くことができた等の声が聞かれました。



それぞれの修了者が所属での役割を發揮しながら、院内での看護の質向上に繋がる実践者になることを期待していきたいと思います。

石飛看護部長から講評をいただきました



上級臨床指導者育成プログラム受講者の発表



チェンマイ大学交流事業参加者の発表



特定行為研修受講者の発表



上級臨床指導者育成プログラム 修了証授与式



左から修了者 山口敦子(B8)、吉井伸栄(E7)、田中美由紀(C8)、小走嘉彦(B6)

3月18日(火)、令和6年度の上級臨床指導者育成プログラムを修了した4名に対し、修了証が授与されました。

このプログラムは、上級臨床指導者＝看護学生への指導を行う実習臨床指導者のリーダーを育成するものです。院内外や大学の研修で学ぶことで、若い世代への教育についての考え方をアップデートし、自分のものにできたようです。

今後、この上級臨床指導者は学生だけでなく、院内の教育を担う者(エデュケーター)として、再編される方向で検討されています。院内看護教育の一層の充実が期待されています。



特定行為研修 閉講式

3月18日(火)、看護師特定行為研修の閉講式が行われました。

令和6年度は急性期コース4名、慢性期・在宅コース10名が修了しました。

病院長からは修了生1人1人への修了証授与の後、挨拶をいただき、川口教授からは訓示をいただきました。

特定行為を行う看護職の活躍が益々期待されていることから、附属病院では令和7年度から看護師特定行為支援センターを設置し、修了生と研修でお世話になった方々その後押しをしたいと考えています。修了生の皆様の今後のご活躍を期待しています。



【急性期コース修了生より】

(急性期コース9期生) 奈良県立医科大学附属病院 C棟6階 鈴木 裕史

急性期一般病棟に勤める私にとって、超急性期の治療を行うICU/救急科での実習は新たな学びの連続でした。先生方との話し合いでその考えを学び、今まで見ることのなかった視野・見地を得ることができました。そして超急性期の治療を経て一般病棟に引き継がれているのだと理解し継続看護の重要性や、予測的視野をもって患者さんを観察・評価する必要性について再認識しました。また身体面の評価だけでなく超急性期からターミナルに至るまで、様々なフェーズにいる患者さん・家族さんへの精神的な支援をはじめ、倫理的観点についても学ぶ機会を頂き、多角的に患者理解を深められました。今回学んだ技術・知識を患者さんへ実施する中で、メリット・デメリットを熟慮し、これまで自分が培ってきた臨床経験知を加え、より総合的な判断や責任のもとケアを行っていきたいと思います。また今後はこの学びを病棟スタッフに還元し、予測的視野を共有し、OJTを推進させることでチームで患者さんの重症化予防や安全管理に努めてまいりたいと思います。



【慢性期・在宅コース修了生より】

(慢性期・在宅コース7期生) ゆい訪問看護ステーション(受講時) 中辻 美香

在宅においても、適切な医療処置やケアを必要時に提供することが、利用者が安心して過ごすために必要と考えています。訪問看護師による特定行為の実践は、利用者の安心に繋がるのではないかと考え、特定行為研修を受講しました。受講開始間もない頃に「利用者・家族は、これまで通り医師にしてもらいたいのでは？」という疑問を投げかけられましたが、当時は答えを見出すことができませんでした。研修で講義、演習、グループワーク、実習を進めていくなかで、多くの方の価値観に触れ、自分自身と向き合い、様々な視点から看護について考えることができました。医学的知識を学んだことで、看護の視点がより多角的なものとなり、その知識・技術を用いてアセスメント・看護を実践し、多職種で質の高いケアの提供ができれば、在宅チームの信頼も強固なものになると考えます。そのなかで特定行為の実践が成り立つのだという考えに至りました。今後は研修で学んだ知識を深め、技術力を高め、多職種で質の高いケアを提供し、利用者が最期まで家で過ごせるように支えていきます。

研修生を受け入れて頂いた研修施設の指導者・関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

今後のセンター事業

【地域貢献事業】

☆災害医療のキホンのキ 日時:6月22日(日)10:00~16:00

発行元: 公立大学法人奈良県立医科大学 看護実践・キャリア支援センター (TEL0744-22-3051 内線 3233)

